

子どもに生きよう

莊 司 雅 子



教育史上偉大な教育者として後世にその名のつたえられている人は、いずれも幼児や児童に対する深い愛情と尊敬と信頼の心に燃えていた。ベスタロッチのように、子どもに対する強い愛から子どもを育てずにはいられないものもあり、フレーベルのように幼児のうちに宿っている神性に対する敬の念からその神性をひきださずにはいられないものもあり、またトーマス・アーノルドのように、終始一貫生徒を信頼することによって、優れた教育の効果をあげ、立派な校風をかもしだした人もある。

幼児教育はいうまでもなく学校教育の地盤であるから、何よりもまず、幼児のもっているもろもろの素質や能力の健全な発育をほかり、幼児の内面力を保護し、はぐくまなければならぬ。だから幼児のもろもろの素質やもろもろの能力がいかなる方向に伸びつつあるかを静かに観察し、その伸びつつある萌芽を立派に育

てなければならぬ。それには教師自身が子どもの水準までおりていかなければならぬ。ルソーにいわせると、子どもをわれわれの高さまで引きあげるのではなく、われわれが子どもの低さまでおりていかなければならぬ。われわれは幼児の水準までおりていくのでなければ、真に幼児のもつもろもろの精神的な方向を感知し、幼児の内面力のさきやきをききとることはできない。

ただわれわれが、このように幼児の水準までおりうるためには、幼児に対する深い愛と敬と信とがなければならぬ。親の子に対する扶養が親子の間の愛の紐帯を通じておこなわれるように、保育活動も保育者の幼児に対する愛が原動力となつてはじめてなりたつのである。愛なきところには保育活動はない。すでにみてきたように、幼児のうちには伸びゆくいっさいの萌芽が深く秘められており、発展へのいっさいの可能性が秘められている。

しかもこれらが幼児に宿っていることを知るには、幼児に対する深い愛情がなければならないし、また教育者が自己を幼児と同じレベルにおかなければならない。いいかえると、真に幼児に生きうる人にして、はじめて幼児の真の姿をとらえることができ、幼児の一挙手や一投足にも深い意味をくみとることができる。このような人にしてはじめて幼児の活動のもつ創造的な意味を理解し、これをはぐくみ育てずにはいられないようになる。幼児はすでにフレールベルもいうように、あたかも人類にとって一個の蕾であって、そこには発育の条件もしくは完成されていく完全な人間の姿が秘められている。そしてこの大事な蕾は、幼児教育者の温かい人格の懷に抱かれなければ枯死するほかはない。幼児教育者の愛の発動によって、はじめて保育活動が具体化される。くわしくいえば幼児をはぐくみ養わずにはいられない切なる愛情がまず幼児教育者から発動し、これに感応して幼児のうちに秘められたものが触発される。愛はこのように保育の原動力である。幼児教育者は子どもに対する強い愛情と優れた知性とをもっていなければならない。のみならず他方、人類愛や社会愛に目覚めて子どもを立派な社会人として育てあげようとする心がまえも幼児教育の大事な出発点である。

以上われわれは、保育活動の原動力が愛であることを明らかにした。しかし、愛だけではなくて、子どもに対する敬の心もまた

欠くことのできない保育精神でなければならない。われわれの仕事はただ対象の存在を認めるだけではなくて、さらにその存在のもつ意味と価値とに対する確信が必要である。あたえられたものという意味と価値とに対してなんの確信をももちえないならば、われわれはその対象に対して働きかけることはできない。対象の意味と価値とに対する確信は必然的にその対象を尊重させずにはおかない。それが敬である。一般に、愛は主観的であるが敬は客観的である。

というのはその事柄の真の意味と価値とをとらえることができれば、おのずからその事柄に対して尊敬の念が湧いてくる。いま子どもについていえば、ベスタロッチのような汎愛主義者であり、「心臓の天才」とよばれている人はいかなる子どもに対して、ひとしく強い愛情をそそぐことができる。しかし人はすべて「神人」とよばれるベスターのようになることはできない。ただしわれわれが児童の本質や、児童が人類にとってなんであるかを真に理解するならば、子どもを愛することはできなくても、子どもを敬し、子どもをだいにすることはできる。また愛は一般に、か弱いものや貧しいものや憐れなものに対して発する情であるが、敬はこのような愛とはちがって、一般に偉大なものや永劫なものや価値あるものに対してあらわれる情である。保育活動の対象としての幼児はすでに述べたように、幼くはあるがしかし単に

弱いものでもなく、貧しいものでもなく、また憐れなものでもなくて、フレーベルのいうように、神の似姿として、神によって創られた人類の子である。保育活動は、このような神の子であり人類の子である幼児の神性を育成する仕事であるから、これよりも尊い仕事はない。

フレーベルの幼児教育は幼児の神性に対するこのような敬の精神から出発している。そこでかれは世の母親をいましめずにはいられなかった。というのは世の多くの母親は、わが子を自己の所有物として本能的な母性愛で育てている。このような世の母親に對するいましめの書、それがフレーベルの『母の歌と愛撫の歌』である。この書の意図するところは、母親に幼きわが子の本質のなんであるかを知らせることによって、母性の知覚、特に教育者としての母性の自覚をうながし、同時にその育て方を教える点におかれている。

かれはこの書についてこういつている。

「神が宇宙に、野に、畑に、牧場に、森に、子どものために遊ぶために、飢えたもののために食うために、偉大な人間の教育書を書かれたと同じように、わたくしは子どももの遊びにおいて、人間の愉楽において、人間の教育書を書こうと思う。このようにしてわたくしの魂・わたくしの精神、それが長い間本質としていたいたものが実現し、形となってあらわれるであらう。」

フレーベルにいわせると、真の人間教育の出発点ないしその最も純粋な根源は母であり、神と一致した敬虔な心をもった母であり、こうした母とその子との内的一致である。だからわれわれはこの書のなかに、自己の使命の尊さに感激して、心の底から「さあいっしょにわたくしたちの子どもを育てましょう……。」と気高く叫んで、胸いっぱいひとりの母が、歌と遊戯とで子どもを聡明と多面的な生命の調和とに向かって育てようと努力している姿をみるであらう。

そこにはまた、人間の教育という自己の尊い天職のいとも困難なことを感じながらも、信仰深く神を信頼し、敬虔深く神と一致しつつ、忠実に確固と落ちついた努力をつづけているひとりの母の姿をもみつけることができる。

以上のようにフレーベルは一方において世の母親に子どもを敬せよと叫びかけつつ、他方において、彼自身および世の幼児教育者に次のように叫んでいる。「いざやわれらが子らに生きようではないか！(Kommt, lasst uns unsern Kindern leben)」彼ら子どもと共に、子どもを生き抜いた教育史上の第一人者であった。実にフレーベルが教育に身をおいてから四十数年の間、すべてを子どもに捧げ、彼と共に子どもを生かせしめ、子どもと共に彼を生かせしめた。おそらく彼ほど深く子どもの姿を凝視し、身をもってそれをとらえたものはなかったであらう。フレーベルはあら

ゆる場所、あらゆる機会において子どもの真の姿をとらえようと努めた。そしてそれによって子どもの生活を向上させることを忘れなかった。彼は自分自身の幼年時代の生活をもう一度、しかも美化して送るという気持で子どもと生活した。このことについてフレーベルは自叙伝に述べている。いかに彼が子どもと一身体になつて生活し、そうすることによってひたすらに子どもの本質の発見に努力したかがわかる。だからフレーベルの教育研究は、実は、児童研究に終始したといつても過言ではない。彼の教育学的思惟は、子どもの本質と密接に関係している。いな、むしろ子どもの本質から出発してかれの教育は発展したというほうが妥当であろう。それゆえにフレーベルは子どもに何を教え、いかにして教え、何時教えるかということのために子どもを研究したのではなくて、子どもの自己発展を助けるために子どもを研究したのである。

フレーベルこそは真に子どもに生きぬいた人であつた。

以上のように考える時、幼稚園とはいつたい何をするとところであるかがほぼわかるであろう。それは教師が子どもに歌や遊戯を教えたり、図画を描かせたり、お話をきかせたりするところであろうか。それともお行儀やいろいろの基本的習慣をしつけるところであろうか。なるほど幼稚園で子どもたちは歌ったり踊ったりしている。図画を描いたり粘土細工をしたりお話をきいたりして

いる。いろいろの習慣をおぼえたりしている。ただ問題は子どもたちが自分自身で歌っているか踊っているか、それとも歌わせられて踊らせられているかである。もしも後者であるならば子どもはその際、人形であるか、ロボットであり、決して独立した人格をもつた生命の通える人間の動作ではない。すなわち子どもは真に生きていないことができる。生きることは活動することであり、自発的に活動したり行動したりすることでなければあまり意味はない。

幼稚園はその名称通り子どものための花園であり、子どもがそこで生き生きと活動している場所でなければならぬ。一般に花園の植物はいずれも他との調和をたまちながら自己の個性に生きている。園丁はこれらの植物をそのように生きるように手入れをしている。

幼稚園の園丁である世の教師よ、子どもに何を教え、いかに教えるかについて心を煩わすのは時間の浪費である。それよりも子どもも幼稚園で真に生き生きと生き、またそのように生かせるために、教師はいかに生きなければならぬか、を研究する方がはるかに賢明ではなからうか。三歳の幼児であれば三歳なりの生き方があり、五歳の幼児は五歳児としての生き方がある。幼児をして幼児らしく生かすよう生きようではないか。

(広島大学)